

# 『和歌一字抄』にみえる源行宗詠をめぐって

— 輔仁親王と源有仁におよぶ —

芦田 耕一

## はじめに

平安後期の歌人に源行宗（一〇六四～一一四三）がいる（1）。父は従二位参議基平（一〇二六～六四）であり、曾祖父に三条天皇（九七六～一〇一七）、祖父に小一条院敦明親王（九九四～一〇五一）をもつ三条源氏である。白河院（一〇五三～一一二九）の側近であり、崇徳天皇（一一一九～六四）歌壇では長老格として活躍した。兄に行尊大僧正（一〇五五～一一三五）、姉に後三条天皇女御の基子（一〇四七～一一三四）がいる。従三位、非参議、修理大夫・大蔵卿・越前権守などを歴任し、和歌事績としては、『金葉集』に七首、『詞花集』一首、『千載集』二首、『新古今集』三首入集など、そして多くの歌合等にも参加し、家集に『行

宗集（源大府卿集）が存し、また六条藤家藤原清輔（一一〇八～七七）撰の永万元年（一一六五）七月までの成立とされる『続詞花集』に六首入集するなどひとかどの歌人である。とりわけ注目したいのは、同じ清輔撰の『和歌一字抄』（以下、『一字抄』と略す）に実に多く採収されていることである。『一字抄』におけるその事由を行宗と縁戚関係にある輔仁親王・源有仁父子を絡ませて論じ、かつ歌稿入手の問題を明らかにしていきたい。

歌学書として撰集された『一字抄』は久安六年（一一五〇）一二月八日以降、仁平四年（一一五四）五月二八日以前の成立と推測されている。上下二巻からなり、ある一字（または二字）を標目として、上巻一〇〇項目、下巻は九五項目に選別し、その字を含む結題（または複合題）およ

びその題による和歌を挙げたもので、作歌の便宜に資する手引書、あるいは秀歌撰として編まれたものである。現存伝本は、清輔の手による形を留め、後代の増補歌を含まないとされる原撰本系統（上巻のみ。二系統。四五一〜四七四首）、藤原定家の歌一〇首ほどが増補されたとみられる中間本系統（下巻のみ。一系統。四八〇首）、そして増補本系統（上下二巻。五系統。一一七〇首前後）と三分類されるが、とりわけ増補本系統は清輔自らによる追補に加えて裏書にあったと思われる鎌倉時代以降の歌等が増補されていると指摘されている。なお、和歌一字抄研究会による『校本和歌一字抄 付索引・資料』が刊行され、原撰本系統四本、中間本系統二本、増補本系統二二本と現存する伝本のほぼすべてが取り挙げられており、裨益するところがきわめて大きい。

一

『一字抄』での行宗の入集歌数は三八首（集内の重出歌二首を含む）と多くを数える。増補本系統を底本とする『新編国歌大観』では「異本歌」を除く総歌数は一一七二首であるが、『一字抄』で二〇首以上入集する歌人とその歌数を

挙げてみよう。（ ）は集内の重出歌数である。

源俊頼 一四三首（一五首） 藤原顕季 一一一首（二首）  
藤原定家 四二首（なし） 源経信 三七首  
（一首） 大江匡房 三四首（四首） 藤原忠通 二  
八首（なし）

定家詠は増補されており、また成立時に存命するのは藤原忠通だけである。顕季と匡房はともに白河院の近臣である。当代歌人としては行宗は俊頼、顕季に次いで採収されることが分かるであろう。二〇首以下の主要歌人を取り挙げてみると、藤原範永は一九首（一首）、藤原公実一七首（なし）、良暹一七首（一首）、藤原実行一六首（一首）、白河院一四首（四首）、源頼家一四首（なし）、崇徳院一三首（なし）、源有仁一三首（なし）であり、このうち実行と崇徳院が存命である。錚々たるメンバーであるにもかかわらず、行宗よりも入集歌数は少なく、さらに存命の清輔父顕輔は一首（なし）であることにも注意したい。

集内の重出歌を除く行宗の三六首のうち、『行宗集』には八首入集し（うち一首は『金葉集』に重出）、『一字抄』成立以前の歌集等では『金葉集』に一首が入集するだけである。

『行宗集』は三六九首から成り、未整理なところもある

が自撰家集とされている。その冒頭に「長承元年十二月  
炎上之後随思出書之」と特記され、晩年の長承元年（一一  
三二）一二月の邸宅炎上で歌稿を焼失している。内容は大  
きく三部に分かれ、第一部は、「随思出書之」の詠歌（一〇  
七一番）、そして炎上後から保延五年（一一三九）五月ころ  
までの詠歌（七二〇一八二番）から成り、ほぼ年代順に配  
列されている。第二部は「百首」と記し、堀河院百首題に  
よる崇徳天皇初度百首歌群（一八三〇二八〇番）であり、  
第三部は天承二年〜保延元年（一一三二〜三五）ころの雑  
纂的歌群（二八一〜三六九番）である。

ここで、『行宗集』と『一字抄』に共通する八首を検討し  
ていきたい。

歌と歌題がまったく同じものがあり、歌を省略して詞書  
部分だけを挙げてみると、

『行宗集』九七番「翫名月右近馬場」

↓『一字抄』七七八番「翫」項「翫名月」

（時雨亭文庫蔵『源大府卿集』にはみえない）

『行宗集』二九二番「暁添虫声」

↓『一字抄』三三四番「添」項「暁添虫声」

（『源大府卿集』は異同なし）

『行宗集』三〇九番「菊花臨水」

↓『一字抄』六四五番「臨」項「菊花臨水」  
（『源大府卿集』は異同なし）

である。九七番歌は『金葉集』秋に「翫名月といへること  
をよめる」として入集する。「右近馬場」は歌会の場所であ  
ろう。

次に、ほぼ同じ歌題と考えられる例を挙げる。

『行宗集』九一番「郭公声稀院」

↓『一字抄』三一七番「稀希」項「時鳥声稀」

（『源大府卿集』にはみえない）

『行宗集』三二二番「ゆふべのかぜすだれをうごかす」

↓『一字抄』六二九番「動」項「晚風動簾」

（『源大府卿集』は異同なし）

『行宗集』三二三番「わづかにみるこひ」

↓『一字抄』九二八番「纒」項「纒見恋」

（『源大府卿集』は異同なし）

九一番歌の「郭公」と「時鳥」の違いは、ともに『一字抄』

に頻出するので適宜使い分けているゆえであろう。「院」は

白河院か。行宗と同時代人で同題での歌が『続詞花集』夏

に、

郭公声希といふことをよみける

藤原忠清

たまさかにあふさか山の郭公何かかたらふたえまがち

なり(一二八)

とある。忠清は清綱男、正五位下、治暦四年(一〇六八)生、永久三年(一一一五)出家、没年未詳である。三二二番歌は「ゆふべ」を「晩」とするが、『一字抄』では「夕」「晩」ともに見られるので、これも九一番歌と同様の事情であろう。三二三番歌は文字遣いの違いだけである。問題になる歌二首を挙げてみよう。

『行宗集』九番に、

晩見残菊内府

いつしかとあさとをあけて菊のはなつきのひかりのさすまでぞみる

とある。『源大府卿集』にはみえない。「内府」は永保三年(一〇八三)から没年まで内大臣の任にあった藤原師通(一〇六二〜九九)であろう。「残菊」は晩秋から初冬にかけて咲いている菊のことをいい、朝から夜まで菊を賞美するといふのであるから「晩」に限定するのは必ずしも適確ではない。これは『一字抄』二八〇番「終」項に「終日対菊」として歌詞に異同なくみえ、「終日」は相応しい謂いである。いま、一首は『行宗集』三五五番である。三五四番歌と当歌に歌題はなく、三五三番歌に「はじめてうぐひすをきく」とみえ、三五三番歌と三五四番歌は歌題に適っている

が、行宗詠は、

ゆふかけていくたのもりのすずしきは風こそ秋のつかひなりけれ

であり、歌題とまったく異なる歌になっている。『源大府卿集』にはまったく同じようにみえる。当歌は『一字抄』では「告」項の八二九番にあるが、同じ歌題の八二六番歌から挙げて説明していこう。

草花告秋

源縁

さきにけり口なし色のをみなへしいはねどしるし秋のけしきは(八二六)

同題

雅兼卿

咲初むる朝の原のをみなへし秋をしらす妻にぞ有りける(八二七)

同二首同座

顕季卿

露むすぶ秋にははやく成りにけり浅茅が原のうつろふ見れば(八二八)

同

行宗卿

ゆふかけていく田の森の涼しきは風こそ秋の使なりけれ(八二九)

『一字抄』では行宗詠はこの「草花告秋」に相応しい歌となっている。実はこの歌題で詠まれた歌会が存するのであ

る。『長秋記』の元永二年（一一一九）七月一〇日条に、院北面和歌・也（中略）講師家俊朝臣、講了分散、人々皆宿衣也、題者行宗朝臣、題云、草花告秋、抑於此殿未有和歌会、加之中宮皇子等御座尤可被用祝題也、而無其儀如何、仍下官加祝自誦和歌之、其詞云、はなすゝきけふそほにいてゝよろつよのはつあき風をひとにしらする

とある。「院北面」は院御所の某邸の北面というのであろう。

この院御所については、この歌会に出席している藤原成通（一〇九七〜一一六二）の『成通集』に、

同じ御方にて草花告秋といふ心を

花薄まだほにいでぬ宿ならばけふまで秋をしらずやあ

らまし（三）

とあり、同じ歌題でみられる。この「同じ御方」は当歌の直前の「三条殿に中宮おはしまししに、その御方にて人人月の心をよみしに」（二）とある「三条殿」を指す。「三条殿」は白河院御所の「三条西殿」であろう。鳥羽天皇中宮の待賢門院藤原璋子所生の第一皇子顕仁親王（崇徳天皇）が元永二年五月二八日に誕生したのもこの御所であり、大治四年七月七日に白河院が崩じたのもこの西対北面であった<sup>(2)</sup>。『長秋記』にいう「院北面和歌」は三条西殿西対北

面で行なわれた歌会であり、「中宮皇子」は藤原璋子と顕仁親王である。この歌会を詳しく窺うに、講師は源家俊、題者は行宗、歌題は「草花告秋」であった。歌人は『長秋記』の中略部分に列挙されているが、源顕通・藤原実隆・源雅定・藤原実行・藤原顕季・藤原通季・藤原長実・藤原経忠・藤原家保・藤原伊通・源行宗・源有賢・源雅兼・藤原実能・源家俊・藤原成通・藤原清隆・藤原重通・源師時の総勢一九名であり、ほとんどが白河院近臣近習である。

『一字抄』の八二六〜八二九番歌を検討しよう。まず八二六番歌の源縁は生没年未詳であるが、和歌事績では永保二年（一〇八二）四月二九日の「出雲守経仲歌合」に歌人として参加したのが知られる最後であり、この歌会には名前がみられず既に没していたのであろう。当歌は『金葉集』秋に「おなじこころをよめる」として入集する（一六九）が、『金葉集』の直前の一六八番が他ならぬ源雅兼（一〇七九〜一一四三）詠の八二七番歌であり、「草花告秋といへることをよめる」として入集する。すなわち『一字抄』では、『金葉集』と歌順は逆であるが両歌は並置されている。八二八番歌は『顕季集』に「草花告秋 院人人」とみえ、白河院近臣近習との歌会というのであろう。八二九番歌の行宗詠は歌題に相応しいものとなっており、この時の詠歌と

考えても間違いはない。なお、行宗はこの歌会では題者となつてゐるが、題者が歌を詠むことは、たとえば永承四年（一〇四九）一月九日の「内裏歌合」の式部大輔藤原資業、承暦二年（一〇七八）四月二八日の「内裏歌合」の藤原実政などにその先例が見出される。

このようにみると、この歌会での詠歌が八二七く八二九番と三首並んでゐることになる。清輔は『金葉集』から採り入れた源縁詠、源縁詠と同時詠ではないが同題であるゆゑに雅兼詠を次に置き、そしてこれと顕季詠と行宗詠とが同時詠であることを承知したうえで並置したのであろう。

ところで、これらに付されている「同題」「同二首同座」「同」をどう扱えばよいのであろうか。「二首同座」「二」は注記かと思われるが、この注記自体が後人筆か清輔筆かというやっかいな問題をはらんでゐる。「二」については付されてゐる本も少なく、その意味も不明である。「二首同座」は「二首座」とする本も多くあるが、いずれにしろ二首は同じ場で詠まれたという注であろう。二首とはどれをさすのか。『校本和歌一字抄』は「八二七の左注か」とするが、前述したように八二六番歌と八二七番歌は同時詠とは考えられない。八二七番歌と八二八番歌か、あるいは八二八番歌と八二九番歌かということになるが、いずれにしても八二七く八二

九番歌が同時詠という注にはならないのではなはだ不審であり、後人のさかしらであろう。そうだとすると、本来のかたちは「同題」「同」「同」であり、これだと八二六番歌との区別は明確にはならないが、それなりに理解はなされるであろう。また「同題」「同座」「同」とでも記すこともできたであろう。

最後に、行宗の『一字抄』八二九番歌は、『行宗集』三五五番に「はじめてうぐひすをきく」とみられるが、これでは相応しくないもので、清輔はしかるべき資料により正しい歌題を知り『一字抄』に入れたこと、そして八二七く八二九番歌が同時詠であることは承知していたであろうことを確認しておきたい。

叙上のように、『行宗集』と『一字抄』の共通歌八首を検討してきたが、まったく同じものがあり、また用字を変えたり、相応しい歌題に変えて入集する例もみうけられたが、基本的には『行宗集』に依拠したと考えるても大過ないであろう。

## 二

行宗の『一字抄』入集詠において他出を確認できない歌

は実数二八首となるが、清輔はこれらをどのように入手したのであろうか。

ここに注目したい人物は行宗男の雅重(一一〇四〜六三)である。正五位下、齋院長官・中務大輔・因幡権守・紀伊守などを歴任し、歌人としては、『千載集』に一首、『続詞花集』に三首入集程度で、この限りでは顕著な和歌事績を残していない。清輔との関係では、『清輔集』に、

雅重朝臣まんえふ集をかりて、はかなくみまかりに  
ければ、かのあとを尋ねたるに、かへしつかはさむ  
とて消息かきぐしておきたりけるを、かくなむとい  
へりけるを見て、いひつかはしける

浜千鳥はかなき跡をふみおきてみはいづかたの雲にき  
えけん(三五二)

とあり、『万葉集』を重んじる清輔が貸与するほどに親交があったことが窺える。これ以外にも、清輔が主催する永暦元年(一一六〇)七月催行「太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合」における歌人である。これは「師光家百首」からの撰歌合であり、歌人は一四名、一〇題(一字題)、三五番、判者は源通能で、後に二条天皇が勅判を加えたと思しい。雅重は、清輔(一一一首)、僧俊恵(一一一首)、僧顕昭(八首)、入道空仁(七首)、藤原敦頼(七首)に次いで六首採られて

おり、一勝三負二持の成績であった。その一ヶ月後の八月にほぼ同じメンバーで催行されているものの証本が残っておらず、詳細は不明であるが、ここにも雅重詠が二首みられる。永暦二年七月の「二条天皇内裏百首」には、二条天皇・藤原重家・藤原範兼・源通能・藤原定隆らとともに雅重も出詠している。そして清輔が初めて二条天皇歌壇に交わることを得た応保二年(一一六二)三月七日の内裏歌会には、範兼・藤原俊成・重家・源有房・二条院讃岐らとともに雅重も列席しているのである。

叙上のように、雅重は清輔と同様に二条天皇との親密な結びつきを窺うことができ、清輔と同世代(雅重が四歳年上)であり、かつ父行宗が顕季・顕輔と親交を結んでおり(後述)、二人は親しい関係にあったと思われるのである。

ところで、親密な関係にあるにもかかわらず、なぜ雅重詠は『一字抄』には入らなかったのであろうか。仁平四年(一一五四)五月二八日以前の成立される『一字抄』のころには前述のように、雅重の和歌事績はまったく知られていなかったからである。また仁平元年の撰進とされる顕輔撰『詞花集』にみられないのも当然である。入集するのは『続詞花集』であるが、成立の二年ほど前に雅重は没している。『続詞花集』に入集する全三首を挙げると、

(題しらず)

源雅重朝臣

吉野山ことしを花のきはとみていくよの春をすぐしき  
つらん(五七)

内裏百首歌に、はじめの恋の心をよめる

源雅重朝臣

我が恋は岩まをくぐる山水のもらすにつけて袖ぞぬれ  
ける(四九一)

(題しらず)

源雅重朝臣

我が身はさそふ水まつうき草の跡たえぬともたれか尋  
ねん(八九〇)

である。一首目は出典不明。二首目は「二条天皇内裏百首」  
詠であろう。三首目は前述の永暦元年七月の「太皇太后宮  
大進清輔朝臣家歌合」詠であり、「述懐」で次のようにみえ  
る。

三十五番 左持

雅重

われが身はさそふ水まつ浮草のあとたえぬとも誰かた  
づねん(六九)

右

清輔朝臣

うきながら今はとなればをしき身をこころのままにい  
とひつるかな(七〇)

ともに神妙なり

清輔と番わされて引き分けになつてゐる。「我が身は」詠の  
入る「雑下」部は歌題だけを挙げる例はないが、当歌合が  
一字題であるために具体的に述べずに、ただ「題しらず」  
として入集させたのであろう。

雅重の『続詞花集』三首入集は、源雅兼・良暹・源頼家  
の各三首、源雅定の二首という著名な歌人の入集数からす  
ればかなり厚遇されているのではないだろうか。

以上から清輔の行宗詠入手に雅重が関わっていることは  
推察されよう。行宗没時には清輔は三十六歳の壮年であり、  
顕季・顕輔と親しい行宗から直接家集等を見せてもらった  
とも考えられるが、行宗没の七く一年後の『一字抄』の  
編纂、あるいは和歌資料集成的な歌書(後述)を企図した  
ことにより、雅重から未整理である家集も含めて多くの歌  
稿の提供を受けたのではないだろうか。これは後の六首入  
集する『続詞花集』の撰集資料にも用いられたことは確実  
である(三首は『行宗集』に入集し、三首は独自歌である)。  
行宗・雅重父子の仲は良好であったようだ。『行宗集』に、

正月七日、因幡権守雅重わかかなつかはすとて

うちのむきみがよはひのおいぬればまづそのために  
わかかなをぞつむ(一二五)

かへし



おいのみのかたみにもせよわかかなつむとしのかずをば  
君にゆづらむ（一二六）

とみえる。配列上では、第一部の長承二年（一一三三）一月（一〇八番）から保延元年（一一三五）一月（一二九番）の間にあり、行宗七十と七十二歳である。父のさらなる長命を寿ぐ子に対して、父は子に後事を託すべく長寿を祈っている。

### 三

ここで、雅重に関わる人物を二人取り挙げ、かつ清輔のかれらに対する感懐をも絡ませて論じてみたい。

まず、左大臣源有仁（一一〇三〜四七）である<sup>(3)</sup>。有仁の父は後三条天皇の第三皇子輔仁親王であり、輔仁の母は行宗の姉基子である。さらに輔仁は行宗女と結婚している。ただし有仁の母は行宗女ではなく、源師房の四男師忠女である。この縁戚関係によるのだろう、雅重は有仁に近侍している。このことについては、中村文氏が『台記』により詳述している<sup>(4)</sup>が、ごく簡略に紹介すると、有仁邸に赴いた内大臣源頼長を雅重が出迎え、帰途につく頼長に有仁の命をうけた雅重が笙の手本を差し入れている、有仁の大

饗に頼長が訪れた際に雅重が主人の沓をとっている、頼長が有仁の生前に借覧した式草を雅重を通して有仁の未亡人に返却しているなど、頼長が関わる事例だけはあるが、その様を窺知することができる。年齢的にも、一歳違いであり、有仁は雅重を重用していたのである。院政政権によって権力から遠ざけられていた有仁を雅重が支えていたといってもよいだろう。

ここで有仁の和歌事績をみよう。

『一字抄』以前の『金葉集』に九首、『詞花集』一首、以後の『千載集』五首、『新古今』三首入集しており、それなりの歌人である。『一字抄』には「花園左大臣」「仁和寺左府」として一三首採られており（集内の重出歌はなし）、これは崇徳院と同数である。このうち、『金葉集』入集が四首、『詞花集』は一首であり、これらは『一字抄』と歌題等にほとんど異同がなく、これらによって採収したのであろう。残りの八首が独自歌となる。『続詞花集』には三首入集する（以前の歌集にはみられない）。有仁には家集が存したようであり、『一字抄』五二九番歌が『夫木抄』夏部二の「郭公」に、

御集、一字抄

花園左大臣

たどりゆくしがの山ぢをうれしくもわれにかたらふほ

ととぎすかな（二八〇八）

とみえる。『一字抄』に歌題が「行路時鳥」とある以外に異同はない。「御集」は『夫木抄』においては大臣クラスの人に用いられる「家集」の謂いである。『一字抄』はこの家集を出典としている可能性があるが、『一字抄』所収歌はたとえ家集がある歌人の詠でもそれに入集しない歌が多くみうけられるので、有仁の歌もすべてがこれに拠るのではないだろう。家集も含めて有仁の詠草が清輔に提供されたと思しいが、これは雅重によってなされたのではないだろうか。

清輔は有仁より五歳年少であるが二人の直接の交流は知られるところはない。ただ『袋草紙』上に、『古今集』の証拠となすべき善本として「花園左府御本 貫之妹自筆。仮名序あり。これ閑院贈太政大臣本の伝来なりと云々。新院に進らしむる所なり。その後は書かず」と紹介されている。

この由緒正しき本は「閑院贈太政大臣」藤原実季の伝来の本で、有仁が「新院」崇徳院に献上した本であるという。この本について、藤原教長『古今集註』にも、輔仁親王が所持していた当本が有仁に伝わり、崇徳院が在位の時に献上したとほぼ同趣の記述が見られる。また、『今鏡』「花のあるじ」では、皇孫で、賜姓により源氏になった有仁をしきりに光源氏に擬えようとしている。そして有仁には家集

があり、清輔にとって有仁は魅力的な存在であったと思われる。

次に、有仁の父三宮輔仁親王（一〇七三〜一一一九）をみていこう。

前述したように輔仁は行宗の女婿である。『行宗集』には輔仁に関わる記事が三例みられる。

円宗寺に、宮御共にまゐりて、花前述懐

いろかへぬみどりのまつにこととはむさきちるはなを  
いくかへりみつ（四一）

円宗寺は輔仁の父後三条天皇の御願寺であり、仁和寺の近辺に建立されたとされる。「宮」は輔仁である。これは『金葉集』雑上の、

円宗寺のはなを御覧じて後三条院御事などおぼしい  
でてよませ給ひける 三宮

うゑおきし君もなきよにとしへたるはなはわが身のこ  
こちこそすれ（五一八）

と同じ時に詠まれた歌であろうか。

宮に御経申すとて

ちとせへて君につかへむしるしにはみのりをかねてわ  
れにさづけよ（五九）

御かへし

それにより人をみちびく仏だにのりをばをしむものとこそきけ（六〇）

これは『散木奇歌集』雑上に、

修理大夫行宗が往生要集をかりてかきうつしけるを、  
ほどへにけりとてしきりにこひかへされけれど、か  
きはててとおもひていひつかはしける

攀於期が荊軻にかうべかしけるもさこそはつひにかへ  
さざりける（一三八二）

かへし

修理大夫三宮御製云云

燕丹が深き意を尽せばぞ於期も首を蘇りよけん（一三八三）

とあるのを参考にしよう。源俊頼（一〇五五？～一一二九）  
が借りた『往生要集』の返却を行宗が催促してきたので『史  
記』の説話を持ち出して猶予を乞うのであるが、その返事  
を行宗あるいは輔仁が詠んだというのである。行宗は輔仁  
に仏教を教えるほどに造詣の深いことが分かり、かつ二人  
の親交ぶりも窺いうる。

いま一例は、

梅花当簾

むめがかのたまらずにほふことのみぞしばのとびらの  
とりどころなる（六三）

これをききて、又のつとめて三宮のかひの君のもと  
より

こころをぞしばのとびらにとどめくるむめのにほひの  
なべてならねば（六四）

である。詠歌情況は明確ではないが、行宗がある歌会等で  
「梅花当簾」で詠んだことを聞いた輔仁の女房が行宗に同  
題での詠歌を遣してきたのであろう。

『袋草紙』上には輔仁と行宗についての著名な逸話がみ  
られる。

嘉保二年（一〇九五）八月二八日に催行の「郁芳門院媿  
子内親王前裁合」において、行宗の歌「物ごとに秋のけし  
きはしるけれど先づ身にしむは荻の上風」が大江匡房の「白  
風にそよぐ音のみ絶えずしていづらは春の荻のやけはら」  
に勝った折に、「三宮仰せられて云はく、「匡房に合ひて勝  
つの条、これ義家の顔を打つが如し」と云々。」とある。「義  
家」は八幡太郎義家（一〇三九～一一〇六）で、猛将とし  
て知られ、匡房に兵法を学ぶ。行宗が匡房に勝ったことは、  
あの義家の顔を殴ったようなものだと言われ、輔仁は行宗を激賞す  
るのである。輔仁は時に二十三歳であり、当時結婚してい  
たかどうかは明らかでないが、義家の女婿である。この「物  
ごとに」詠は行宗がこの「前裁合」で藤原公実にも勝った

「花薄なびかざりせばいかにして吹く秋風の方を知らまし」とともに『行宗集』に「鳥羽殿前裁合」として「萩」（八番）、「薄」（七番）で入り、また『続詞花集』秋下には「鳥羽殿前裁合に」として「花薄」詠（二三四番）がみられ、「秋風になびくすすきとしりながらいくたびのべに立ちとまるらん」（顕季詠、二三五番）、「物ごとに」詠（二三六番）と並置されて入集する。

さらに輔仁は雅重とも関わっている。雅重は齋院長官であったが、その折の齋院は行宗女所生の輔仁女の怡子内親王であり、その期間は長承二年（一一三三）一二月から平治元年（一一五九）閏五月であった（卜定のことは『行宗集』一〇八番にある）。雅重の長官としての事績は康治元年（一一四二）に最も早くみられ、保元二年（一一五七）四月までその職にあった<sup>5</sup>。この在任は輔仁没後ではあるが、その縁戚関係で強く結びついていたのである。

輔仁の和歌事績をみよう。

『一字抄』以前の『金葉集』に九首、以後の『千載集』五首、『新古今』一首入集と、有仁とほぼ同じ扱いをうけているが、『詞花集』入集はない。『一字抄』には「三宮」として六首採られている（集内の重出歌はなし）。このうち、『金葉集』入集が一首あり、これは『一字抄』と歌題等ま

ったく異同がなく、残りの五首が独自歌となる。『続詞花集』には三首入集する（以前の歌集にはみられない）が、これは有仁と同じ歌数である。

清輔の輔仁への思いはどのようなのであろうか。輔仁の没は清輔の十二歳の時である。輔仁の出家に際しては、『中右記』に「才智甚高、能有文章、天之良人、誠惜哉」（元永二年一月二四日）、没した二八日には「吁嗟哀哉、風月之遊已滅天下了」とみえ、藤原宗忠は風流才子でもあった輔仁を愛惜している。清輔は輔仁・有仁父子ともどもに大いなる興味を寄せていたことは確実である。和歌に執した好士達の逸話が『袋草紙』上に多く紹介されていることが何よりも雄弁に語っている。

清輔は彼らへの関心から『一字抄』等への入集は当初から念頭にあったことはまず間違いあるまい。父子の入集歌数については、ともに『続詞花集』入集が三首であり、これは同じ三首の雅重と同様に厚遇されているだろう（雅重も二人と同歌数であるのは偶然か）。しかし『一字抄』においては輔仁六首、有仁一三首と違いをみせるも、これは有仁の家集の存在に拠るであろうが、ともに事績に相応しい扱いをうけているように思われるのである。

このように、雅重を介して輔仁親王と源有仁にまで言及

したが、『一字抄』以前の歌集に他出が確認できない独自歌が輔仁は五首（全六首）、有仁は八首（全一三首）、さらに『続詞花集』ではともに三首である。これらの入手先は、行宗詠同様に雅重と考えてもよいのではなからうか。輔仁は清輔が十二歳の時に没しており、かつ有仁においては清輔との直接の交流は資料的には知られるところがないので、清輔は彼らと縁戚関係にある雅重を通じて家集や歌稿を提供してもらったのであろう。

#### 四

清輔はなぜ行宗の歌を多く採収したのであろうか。輔仁・有仁に相応しい評価を与えたのと同様に行宗も入集歌数からみて評価していたことは推測される。

行宗は白河院近臣であったことを挙げなければなるまい。その関係で顕季・長実・顕輔らが参加する歌合や歌会に多く出席している。これらを煩を厭わず紹介すると、最初は前述の嘉保二年（一〇九五）八月二八日の「郁芳門院媿子内親王前裁合」である。和歌の作者は顕季・顕輔のほか、顕季の長男長実と二男家保、藤原公実・藤原通俊・藤原実行・大江匡房・周防内侍など錚々たるメンバーで、行宗は

三十二歳、従四位上、匡房と公実に勝つという健闘ぶりであった。

永久四年（一一一六）四月四日には「鳥羽殿北面歌合」が行なわれる。主催者は白河院、顕季・長実・顕輔・源雅定・藤原仲実らが歌人であり、院司や院近臣の人々による歌合である。

元永元年（一一一八）六月二九日には「右兵衛督家歌合」が行なわれ、主催者は実行、顕季の女婿である。顕季（判者を兼ねる）・長実・顕輔・俊頼・雅定・永縁法師などの知名歌人のほか顕季妻もいる。伝本は孤本でほとんどが勝負付だけであるが、『袋草紙』下にはその一部が詳しい判詞を付した形で紹介されている。顕季自身による記録が清輔に伝えられたものか。

元永二年（一一一九）四月一日には平等院において行宗の同母兄の行尊大僧正のもとで「逆修結願和歌会」が行なわれるが、行宗以外の参加者は顕季・長実・顕輔・俊頼・雅定・実行・顕仲らであり、「止宿草庵」で詠まれ、『六条修理大夫集』や『行宗集』にみられる。

前述したように元永二年七月一〇日には「院北面和歌会」が行なわれ、顕季・長実・雅定・実行・雅兼などの参加者はほとんどが白河院の近臣近習であった。

白河院崩御（一一二九年）後であるが、長承三年（一一三四）九月一三日には「中宮亮顕輔家歌合」が行なわれる。顕季は既に亡く、判者に藤原基俊をむかえ、顕輔・雅定・神祇伯顕仲・藤原顕方（清輔の同母兄）・藤原成通（母は顕季女）らであり、行宗は「修理権大夫」の肩書きで参加している。その一部が詳細な判詞を簡略にした形で『袋草紙』下に紹介されている。

また、行宗は六条藤家のなかでも特に顕季（一〇五五―一一二三）とは公私ともに親しい関係にあった。

保安元年（一一二〇）一月に長く散位であった行宗は五十七歳で修理権大夫に任じられるが、その上司の大夫が顕季であった。顕季の修理大夫としての在任は寛治八年（一一九四）七月から保安三年（一一二二）一二月までと長い。二人が同僚の期間は三年弱であった。行宗が多くの歌合に参加したことも与って顕季が推挙したのであろう。

個人的な親交は行宗が散位の折の顕季との贈答にみられる。『六条修理大夫集』に、

この歌をききて前兵衛佐ゆきむねの君のもとより  
ふぢのはな見ぬよそ人のこころにもきくにつけてぞな  
ほかかりける（一一三六）

ふぢの花ころにかかるものならばたづねてまつもな  
どかみざらん（一一三七）

とある。「兵衛佐」としての最後の事績が確認されるのは寛治七年（一一〇九三）一〇月三日の日吉社御幸である。「この歌」とは、

東山観音寺といふ所にてふぢの花いとめでたかりし  
に、人人、藤并恋歌よみしに

ひたすらにいまもむかしもわすられで心にかかるふぢ  
のはなかな（一一三四）

しるらめやおとにのみきくかづらきのやまのみねども  
こひわたるとは（一一三五）

を指す。この東山観音寺のことは『散木奇歌集』春に、

修理大夫顕季、観音寺の藤花さかりなりと聞きて、  
見にまかりけるにさそはれければ、まかりてよめる  
吹く風にふぢえのうらをみわたせば波はこずゑの物に

ぞ有りける（一一八二）

とあり、同じ時のことかと思われる。そうだとすれば、一三六番歌は顕季に誘われなかった行宗の恨み言の歌となり、ここに両人の親しい関係を窺いみることができるといえる。

さらに『行宗集』にはいつのことか不明ながら、

鳥羽どのにて暁郭公を聞きて、修理大夫のもとへつ  
返し

かはしし

きくらめやみやまたちいでてほととぎすいまこそきな  
けとばたのわたり(三〇)

かへし

顕季卿

よもすがらねでまつものをほととぎすおなじわたりに  
わきてなくらむ(三一)

同じ人、としごとにかみがみをつかはしし、たづね  
につかはしたりしかば

なほざりのことのはをだにきかましやあふぎのかぜの  
たよりならずは(三二)

かへし

なほざりのかぜのたよりとおもふなよこのかみがみも  
かけてちかはむ(三三)

とある。

叙上のように、行宗は六条藤家と縁戚関係にはないが、  
強固な繋がりがあったことが確認されたと思う。こと清輔  
において、行宗は歌人としては高い評価に値する存在であ  
った。しかし、行宗詠は顕輔撰『詞花集』には反映されて  
おらず、わずか一首しか入集していないのである。『詞花集』  
の成立は仁平元年(一一五一)のこととされており、久安  
六年(一一五〇)―二月八日以降、仁平四年(一一五四)

五月二八日以前の成立と考えられている『一字抄』と時期  
的にほぼ同じである。『詞花集』は四一五首ほどの歌数で、  
しかも『金葉集』の成立から二〇数年しか経っていないた  
め、『拾遺集』『後拾遺集』時代の歌人が歌数の半分を占め  
る状態であり、当代歌人はかなり入集するものの歌数とし  
ては一首の歌人が多い。当代歌人としてもよい他ならぬ行  
宗も一首歌人である。しかし、六条藤家が関わる歌合等に  
出詠する藤原顕綱男の道経(生没年未詳)は二首、『金葉集』  
はなし)、源俊房男の師頼(一〇六八―一一三九)は三首、『金  
葉集』は五首)、藤原忠教男の教長(一一〇九―八〇ころま  
で生存か)は二首(『金葉集』はなし)、藤原公実男の実行  
(一〇八〇―一一六二)は二首(『金葉集』は六首)入集す  
る。各歌人の『一字抄』と『続詞花集』への入集歌数をみ  
ると、道経は無しと四首、師頼は二首と二首、教長は無し  
と七首、実行は一六首と四首というように清輔はおのおの  
にそれなりの評価を与えているように思われる。清輔は『詞  
花集』に関わったこともあり、行宗はこれら歌人とまった  
く遜色がないにもかかわらず一首のみであり、これに不満  
を抱いたのではないだろうか。それでなくとも『詞花集』  
をめぐる父子の関係はけっして良好なものではなかつ  
た。そのためほぼ同時期の『一字抄』には三八首、そして

『続詞花集』に六首と多く入集させたのであろう。

もちろん個人的な臆負も大いにありうる。和歌の選定はもつとも私情の入りやすいものであり、ある程度はやむを得ないこともあるだろう。特に『詞花集』は六条藤家ゆかりの人物が多く入集していると指摘されており<sup>(6)</sup>、また当代歌人の入集は概して少ないとされている。ともあれ、三八首と六首の入集はかなり評価されていたことは間違いあるまい。

このように、清輔は行宗詠および行宗と縁戚関係にある輔仁・有仁の詠歌を雅重から提供を受けたと考えられるのであるが、これは清輔が『一字抄』の編纂、あるいは和歌資料集成的な歌書を企図して要請したゆえであろう。いずれにしても、これは後に永万元年(一一六五)以前の成立とされる大部な『題林』(散佚)として結実し、さらに晩年に増補された『扶桑葉林』(佚文のみ残存)へと発展していくのである。

〔付記〕

和歌の引用は、『清輔集』は拙著『清輔集新注』、

他は『新編国歌大観』による。『袋草紙』は「新日本古典文学大系」による。『長秋記』『中右記』は「増

補史料大成」による。

〔注〕

(1) 源行宗の経歴等については、酒井美穂「源行宗年譜」(「立教大学日本文学」第六十四号)に詳しい。

(2) 『平安時代史事典』所収「三条西殿」項(隴谷寿執筆)

(3) 源有仁の経歴等については、加島吉春「源有仁年譜

〔付〕有仁とその文学サロン」(「平安朝文学研究」復刊第五号)に詳しい。

(4) 中村文『後白河院時代歌人伝の研究』所収「II 二条天皇とその周辺 第六章 二条天皇内裏百首―雅重・定隆・通能―」

(5) (4)に同じ。

(6) 松田武夫『詞花集の研究』

(本学名誉教授)